

令和5年度 第3回 JTTRI グローバルセミナー

「欧州の鉄道政策が向かう未来とは？」 ～日本と欧州の鉄道政策を比較しつつ～

ご挨拶

- ただいまご紹介頂きました、国土交通省国際統括官の田中でございます。本日は、第3回 JTTRI グローバルセミナーにお招きいただきまして、誠にありがとうございます。
- まずは、令和6年能登半島地震で亡くなられた方々に心からお悔やみを申し上げますとともに、被災された全ての方々にお見舞いを申し上げます。発災から三週間が経過しましたが、国土交通省としましては、引き続き、現場力を最大限発揮し、関係機関と連携しながら、被災者・被災地に寄り添った対応をしてまいりたいと考えております。
- さて、本セミナーの開催にあたり、国土交通省を代表しまして、一言御挨拶申し上げます。本日のセミナーでは、「欧州の鉄道政策が向かう未来とは？」とのテーマの下、インペリアルカレッジ・ロンドン未来鉄道研究センター長のスミス名誉教授はじめ、経済学、交通工学の各専門家の皆様から、ご講演、またパネルディスカッションいただくものと伺っております。
- 昨今、地球規模の環境問題や慢性的な交通渋滞による経済損失への対応等の観点から、自動車や航空機と比較した輸送量当たりのCO2排出量が少なく、エネルギー効率に優れた輸送機関である鉄道に対する期待が世界的に高まっております。特に、欧州においては、欧州グリーン・ディール政策のもと、「2050年までに運輸部門からの温室効果ガス排出量を90%削減する」との目標達成のため、鉄道利用の拡大、また化石燃料を利用する他の交通手段から鉄道への移行が重要視され、各種取組が進められているものと承知しております。

- また、英国においては、新型コロナウイルスの感染拡大により鉄道利用者数が大幅に減少し、現行のフランチャイズ制度の維持が困難となったことを受け、鉄道インフラや鉄道網の運営を一元的に管理する公的機関（Great British Railways・GBR）の新設、GBRが収入リスクを負担する鉄道運営改革案（The Williams-Shapps Plan for Rail）の策定が進められていると承知しております。個人的には、昔ロンドンに留学していた際に、英国の鉄道史初期に建設されたパディントン駅のそばに住んでおり、ハリー・ポッターで有名なキングス・クロス駅もよく利用していたので、英国の鉄道がこれからどのように発展していくのか、非常に興味深く見守っております。

- さらに、ドイツにおいては、1994年の鉄道改革以来最大のインフラプログラムとして、2027年までに400億ユーロを鉄道インフラに投資するとの方針が発表され、路線の更新、駅の近代化、鉄道輸送のデジタル化等、2030年までに40の鉄道路線、合計4,000 kmが改修される予定であると承知しております。

- このように、世界的な脱炭素化政策の潮流やコロナパンデミック等を受け、欧州の鉄道政策は一つの変革期を迎えております。こうした中、欧州と日本の比較により、その将来像について意見交換を行う本日の機会は大変貴重なものであり、今後の我が国鉄道政策を考えるにあたり、大きな示唆を得られるものと期待しているところでございます。

- 最後になりますが、本セミナーが、欧州及び我が国双方の鉄道政策の更なる発展に資するものとなることを祈念いたしまして、私からの挨拶とさせていただきます。

令和6年1月22日
国際統括官 田中 由紀